

## 人権課題「同和問題(部落差別)」に関わる取組 第6学年 総合的な学習の時間 芝浦と場「お肉の情報館」見学

### 人権教育の視点

食肉市場の役割とそこで働く人々の仕事について正しく理解することを通して、食肉市場や仕事に対する偏見や差別の不合理性に気付かせ、偏見や差別の解消に向けて主体的に行動する態度を養う。

6学年 総合「食肉市場とわたしたちの暮らし」の学習では、食肉市場で働く人から仕事について話を聞いたり、お肉の情報館を見学したりすることで、肉が自分の生活とどのように関わっているかを調べた。その活動の中で、児童は食肉市場で働く人への不当な偏見・差別が残っていることに気付き、その偏見・差別解消に向けて、自分たちができることをグループで話し合ったり、考えたりしたことを発表したりした。

児童は、食肉を食卓に届けるために働いている人々の存在を知り、食べ物を大切に作る姿勢が高まると同時に、職業による偏見や差別を自分は絶対しないと考える児童が多く見られた。



## 人権感覚を育成する日常的な取組

人権感覚を育成する日常的な取組として、友達から掛けてもらった嬉しい言葉や、心が温かくなったエピソードなどを振り返る取組を行ってきた。各学級から集まったハッピーなエピソードなどを、階段にある掲示板「ハッピーボード」で紹介した。

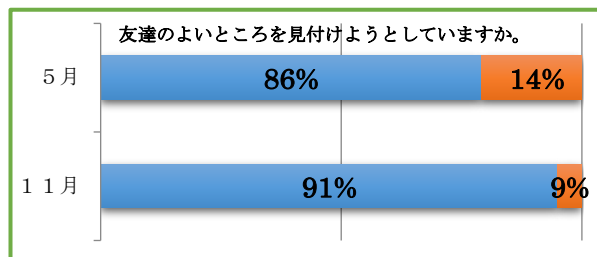
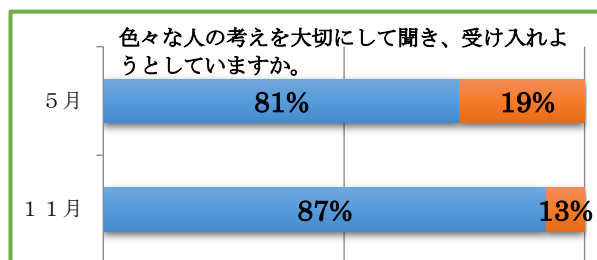
また、お互いを尊重し合うために、あいさつを広げる活動を行った。あいさつが多くできると「あいさつの花」が咲き、その花を掲示していった。このように、授業だけでなく、日常的に人権感覚が高められる環境をつくっていった。



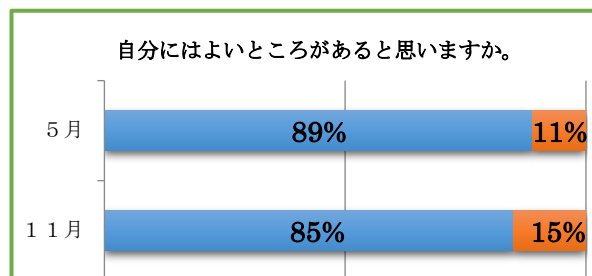
## 次年度の研究に向けて

5月と11月に児童対象のアンケートを実施し、意識及びその変容を調査した。

### 【児童アンケートの結果】



「友達のよいところを見付けようとしていますか。」「色々な考えを大切に聞き、受け入れようとしていますか。」の項目で肯定的な回答をした児童が増加した。このことから、他者と進んで話し合おうとする態度が育っていることが分かる。



一方「自分にはよいところがあると思いますか。」と答えた児童は、4%下がった。他者を大切に思う思いが育つと同時に、自分と他者を比較し、自分の良いところが見付けづらくなったことが考えられる。自己肯定感を高めていくことが今後の課題である。

次年度に向けて、全校でプロジェクト型学級活動を通して、児童が互いに認め合い、高め合おうとする意識を育てていく。

また、人権教育における「普遍的・個別的な視点からの取組」の授業の一層の充実を図り、自分や他者の人権を守ろうとする意欲や態度を今後も育てていく。

### 【御指導いただいた先生方】

玉川大学TAPセンター 准教授 川本 和孝 先生

大田区教育委員会指導課 遠藤 健太 指導主事

懇切丁寧な御指導をいただき、誠にありがとうございました。